

台湾

派遣期間 2015年4月～2017年3月


台中日本人学校

帰国報告

北広島市立大曲小学校
教諭 折内大輔

1. 台湾について

(1) 台湾の略史及び概要

230年	孫権が台湾経営を始める。	
1600年代	オランダの支配を受ける。 鄭成功（ていせいこう）の活躍。	
1683～1895年	清朝による統治。	
1895年	台湾が日本に割譲され、日本統治下に入る。	
1911年	辛亥革命により大陸で中華民国が成立。	
1945年	第二次世界大戦終結後、日本統治からの離脱。	
1949年	中華人民共和国の成立により中華民国中央政府が台湾へ移る。	
1988年	李登輝が初の民選総統に当選。	
2000年	陳水扁が総統に当選。	
2008年	馬英九が総統に当選。	
2012年	馬英九が総統に再選。	
2016年	蔡英文が初の女性総統に当選。	

台湾では建国以来、国民党による一党独裁政治が続いてきた。1988年に李登輝が総統に就任して以来、急速に民主化が進み、2000年、民進党・陳水扁の総統就任により、台湾初の政権交代が実現。2008年の総統選挙では国民党の馬英九が勝利し、再び国民党が政権を取り戻した。2012年には、馬英九が再選出、2016年には蔡英文が初の女性総統となり、現在に至る。

一般的には「台湾」の名で知られているが、正式な国号は「中華民国（R.O.C.、Republic Of China）」である。孫文により1911年に成立したアジア最初の共和国で、現在でも建て前としては中国全土を支配していることになっているが、実際は台湾本土と一部の離島のための支配にとどまっているのが現状である。

台湾の人口2,355万人（2017年）のうち約95%以上が漢民族系住民、残りの5%弱が原住民という比率である。そのため、日常生活においては主として漢民族の文化風習を受け継いでいるものが多くみられる。また、台湾では太陽暦（『國曆』と呼ぶ）と太陰暦（『農曆』）が併用されており、祝祭日や年中行事に関しては『農曆』を用いている。



日本では差別的意味合いを感じるため「原住民」と言わず「先住民」という言い方をすることが多いが、台湾にそのようなニュアンスは全くない。市民権をしっかりと得ている。

また、西暦よりも、中華民国の開国記念日（辛亥革命の翌年1912年1月1日）が制定された年を元年とした「民国」という年号が広く使われている（西暦から1911年引いた数が民国年であり、2017年は民國106年）ところが特徴と言える。

台湾の日常生活には宗教がしっかりと根付いている。町の至るところに廟があり、家庭では家族の繁栄を願い、『農曆』の1日と15日にお供え物を携えて廟に出向き『拝拝（神仏や祖先を拝むこと）』を行う。企業や商店では『農曆』の2日と16日に店先に祭壇が設けられ、お供え物や線香をたむけて商売繁盛を願い『拝拝』する姿が頻繁に見かけられる。また、伝統的な台湾の三大節（春節、端午節、中秋節）のひとつ、春節（旧正月）には、朝から晩まで1日中けたたましい爆竹音が街中に響き渡り、各地で盛大に祝われ、台湾全土がお祭り気分になる。

日本や欧米の国々から物資とともに、新しい文化の流行も積極的に取り入れていく現代風の台湾であるが、そんな状況にあっても今もなお古き良き文化がしっかりと根付いている素敵な国であると言える。

（2） 台湾の気候・風土

台湾は東南アジアと東アジアの中心に位置し、かつてポルトガル人が初めて海上から台湾を見た時、「イラ・フォルモサ（麗しの島）」と賞賛したほど、緑に恵まれた美しい島である。

台湾本土の面積は、日本の九州地方とほぼ同じ大きさ。南北に長く、島を東部と西部に二分するように3000m級の高山（玉山や合歡山など）が峰を連ね、中央山脈を形成している

台湾の中部都市・嘉義市の南部に北回帰線が横断し、熱帯から亜熱帯気候に属する台湾は、一年中緑におおわれ、色鮮やかな南国の花が絶えず咲き乱れている。温帯気候の日本のようにはっきりした四季の変化はみられず、「長い夏と短い冬」があるのみである。

台中市の気候は亜熱帯性気候に属し、一年のうち3月から11月が夏、12月から2月が冬というように区分する。年によって多少の寒暖差はあるが、だいたい3月頃からだんだん暑くなり始め、4月には気温が25℃以上にまで上昇。5月から6月にかけては梅雨期となりジメジメした日々が続くが、その後7月から8月にかけて一年で最も暑い時期を迎え、気温は日中35℃前後にまで達し、夜は熱帯夜が続く。また、7月から9月にかけては台風シーズンとなり、台風が来るたびに洪水、土砂崩れなどの災害に見舞われ、被害も多く出る。9月に入っても日中30℃前後の日々が続くが、9月後半頃から10月、11月にかけて次第に気温が下がり始める。気温が下がるといっても20℃から26℃程度はあるのだが、暑い時期との気温差が大きいため非常に肌寒く感じられる。12月から2月頃の気温は最低で一桁の時もあり、雨はほとんど降らず空気も乾燥している。



夏至の日は太陽が頭上に上るため、影が真下に見える。

地理的には、台中市が位置する中西部から南部にかけて豊かな平野が広がり、農業の機械化も著しく普及し、米、茶、サトウキビなどの農作物は年々生産高が増加している。年平均気温は約 22℃と暖かく、パイナップルやスイカなどは、一年中味わうことができる。そのほか、各地でマンゴー、ブドウ、ナシなどさまざまな果物が栽培されている。



台中日本人学校の敷地内にもマンゴーの樹があるほど、果樹はどこにでもあり。ちなみに安い時期であれば、一玉150円ほどで購入可。

(3) 言語

台湾の公用語は、日本で「北京語」と呼ばれる言葉（中国での公用語）で、台湾では「國語」と言われている。「北京語」と「國語」には、一言で言えば言語運用面や発音面において“英国英語とアメリカ英語のような隔たり”があるといえる。最大の違いは「北京語」が簡体字を使用するのに対し、「國語」では繁体字を用いるという点である。また、発音の表記方法においても「北京語」が“ピンイン”と呼ばれるアルファベットを用いた表記法なのに対して、「國語」では“國語注音符號”（ツウイン）を採用している。しかし、一般的には、台湾語（「台語」）を使用している人も多く、台湾南部に行くほどその傾向は強いと言える。

台湾でも日本と同様に英語の学習が盛んで、特に若い世代の人たちには英語が比較的通じやすいように感じられる。また、日本統治時代に日本語教育を受けた年輩の人々や、最近の日本ブームに伴う日本語の学習経験がある若者など、意外な場面で日本語が通じることもある。

儿	ㄛ	ㄨ	ㄩ	一	ㄆ	ㄅ	ㄌ	ㄍ	ㄎ
	ㄛ	ㄨ	ㄩ	ㄨ	ㄇ	ㄨ	ㄌ	ㄍ	ㄎ
	ㄨ	ㄨ	ㄩ	ㄨ	ㄆ	ㄇ	ㄌ	ㄍ	ㄎ
	ㄨ	ㄨ	ㄩ		ㄇ			ㄍ	ㄎ

國語注音符號表。日本のひらがなやローマ字にニュアンスが近く、これを読めるようになると中国語の発音が分かるようになる。

これらのことから、日常生活の中では「國語」を使いつつも「台語」が飛び交い、バスや鉄道などの公共交通機関、エレベーターなどでは、「英語」も自動アナウンスで流れるという、日本ではあまり見られない現象を目の当たりにすることとなる。

(4) 台湾の治安

台湾は、アジアの中では比較的治安が良く、「日本人が安心して旅行できる近い外国」として、今もなお日本人旅行者の人気を集めている土地柄であるが、交通ルールがあまり遵守されていない。特に、バイクと人、バイクと車、車と車の接触事故が非常に多く発生しており、注意が必要となる。



台湾第三の都市である台中市の中心部。札幌よりも規模が大きく近代的な建造物が立ち並ぶ。

(5) 日常生活

台湾で生活を始めると、ほぼ日本と同じ感覚で生活できることに驚く。前述したとおり治安もよく、子どもたちが友だち同士で歩き回っていたり、ズボンの後ろポケットに財布を入れて歩いている人の姿を見かける。また台湾にある大都市部は札幌よりも規模が大きく、中心部の街並みは近代的になっている。

一方、旧市街地に足を踏み入れると路面店が立ち並びいわゆる「昔のアジア」的な雰囲気が残っており、生鮮品から日用雑貨まで各種専門店があつまる市場は、歩いているだけで気持ちが高揚してくる。

街を歩いていると、日本にあるコンビニや量販店、チェーン店も多く、生活に慣れてくると自分が海外で生活していることを忘れてしまうほどである。



市場は、町中いたるところに点在している。現地の方と交流する格好の場と言える。

公共サービスのデジタル化は日本よりも圧倒的に進んでおり、公共料金をはじめ様々な支払いをコンビニやインターネットで済ませることができる。また、医療面でも日常生活で困ることはなく、場合によっては日本の病院以上の水準で治療や診断を受けられることもある。

2. 台中日本人学校の特徴

(1) 台中日本人学校の沿革

前身は、「台北日本人学校台中分校」。1977年4月22日に開校式を行い、台中日本人学校としてスタートする。

1999年9月21日、集集大地震発生。マグニチュード7.6、阪神淡路大地震より大きい地震により、校舎A棟損壊、運動場亀裂多数。学校としての使用が不能となる。10月10日までを臨時休校とし、10月11日より、エンジェル幼稚園において授業を再開するが、プレハブ校舎へ移転できたのは翌年2000年3月22日のこと。この間、多くの方のご尽力により、驚くほどのスピード感を持って新校舎を建造。2001年2月9日にはエンジェル幼稚園から新校舎に移転することとなった。

これ以降、本校では9月21日の全校集会や避難訓練を行い、「当時のことを忘れることなく、感謝の気持ちをもちましょう」ということを確認している。現校舎はこの時に新築した校舎のままで、タータンマットのトラックに一面芝生のグラウンド、屋外プールにきれいな校舎と、素晴らしい環境となっている。

(2) 台中日本人学校の概要（2018年度4月現在）

台中日本人学校のある台中市は、北回帰線のわずか北方に位置し、台北から南へ約170kmのところにある台湾第3の都市。2010年12月に台中縣と台中市が合併。市の人口は約278

万人、台湾中部では最大の都市としての役割を担い、近郊には多くの工業区があり、発展中の都市である。

在籍数は、小学部中学部合わせて計 115 名。小学部の教室は壁のないオープン教室であり 1～3 年生、4～6 年生が一つのフロアで学習している。中学部は受験のこともあり壁のある一般的な教室だが、小学校 1 年生から中学校 3 年生までが、休み時間や行事で仲良く活動する微笑ましい光景が見られる。

学部		小学部						中学部			合計
学年		1年	2年	3年	4年	5年	6年	1年	2年	3年	
学級数		1	1	1	1	1	1	1	1	1	9
児童・生徒数	男子	15	11	10	6	9	6	7	4	6	74
	女子	3	8	5	10	3	3	3	2	4	41
	合計	18	19	15	16	12	9	10	6	10	115

以前は全校で 200 名ほどまで増えた児童生徒数だが、近年、台湾の経済成長が落ち着きを見せてきた影響か企業の進出や派遣職員の減少により、転入児童生徒が減ってきている。

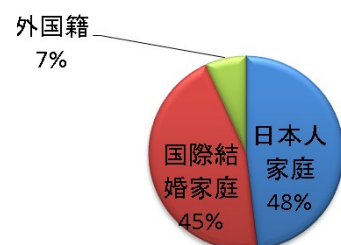


教職員を見てみると、文科省派遣教員は 13 名、現地採用の教職員は 7 名である。教育環境は進んでおり、2016 年度には iPad が導入され、2018 年度からは全教室に天上固定式のプロジェクターが設置された。

(3) 台中日本人学校の特徴

台中日本人学校の大きな特色の一つとして、「国際結婚

表 1 児童生徒の家庭環境



家庭の割合が高い」ということが挙げられる。

右の表1を見るとわかるが、2017年度の段階では、両親ともに日本国籍である「日本人家庭」の割合が48%、両親のどちらかが台湾や諸外国籍である「国際結婚家庭」が45%、両親ともに「外国籍である家庭」が7%となっている。

およそ50%が国際結婚家庭（主に両親のどちらかが台湾国籍）である日本人学校は、世界を見てもそれほど多くない。また、日本ではなく台湾に永住している家族も多く、このような環境で育った子どもたちは、日本語と中国語（北京語）、あるいは台湾語を自由に使いこなす。

本校では、独自のカリキュラムとして「中国語」の授業を週1時間行っている。このことから、転校してきた児童生徒も一年もすると日常会話レベルであれば北京語を理解できるようになっていく。現地の学校との交流会や社会見学、校外学習など、現地の方々と接する場面では、子どもたちが通訳として活躍し、現地の言葉を理解できない派遣教員に教えてくれる場面がごく普通に見られる。

高校進学にあたっては、日本の高校進学だけではなく、台湾の現地高校に進学する生徒も多い。この場合、現地の試験を受験することになるため、日本人学校での勉強が終わった後、自主的に中国語での受験勉強を行っている。

なお、台湾の年度の切れ目は9月になるため、日本人学校から現地高校へ受験する場合、日本の3月の卒業式が終わって数か月してから受験が始まるということになる。

（4） 台中日本人学校の教育

平成30年度現在、週あたりの授業時数は、以下のとおりである。

小1・2	...	週 27時間
小3	...	週 29時間
小4～中3	...	週 31時間

この時数は、日本の標準的な学校の時数よりも週あたりの時数は圧倒的に多いと言えるが、これは、そのまま「英語教育」と「中国語」教育の時間に充当している。小1～中3までの全学年で、ALTの先生によるオールイングリッシュでの「英会話」の授業を週1時間実施。また、現地採用の先生方による「中国語」の授業も週1時間実施している。これらの授業を通し、本校に通う子どもたちは日本語をベースに、英語と中国語も小1から学び続けることができている。英検や漢検を受験することも可能で、毎年一定数の児童生徒が受検している。

一方で、前段で紹介したように国際結婚家庭が多いという本校独自の特徴から、日本語よりも中国語を得意とする児童生徒も多くいる。この中には、日本人学校で学習するにあたり日本語力に難のある児童生徒（特に児童）も多く在学しており、「中国語」の授業は「日本語」の授業との選択制となっている。日本語が苦手な子は「日本語」の授業、中国語の苦手な子は「中国語」の授業を習熟度によって選べる点は、本校の大きな特徴の一つと言える。

(5) 台中日本人学校の一年

大きく日本の学校行事と変わるところはないが、むしろ日本よりも日本文化を感じることのできる行事（特に年中行事）は多い。また、小中併設校なので、小中両方の行事が一年を通してあり、常に多忙感が子どもにも教師にもある。

なお、小学部修学旅行や各学年の校外学習、社会科見学は、台湾にある工場や宿泊施設を使用している。一方、中学部修学旅行は、日本に行く形をとっている。数は多くないが、このとき日本に行くのがはじめてという子もいる。

《主な行事》

1 学期（4～7月）

着任式・始業式・入学式、1年生を祝う会、こいのぼり集会、運動会、中学部修学旅行、芸術鑑賞会、七夕集会、終業式など

2 学期（8～12月）

始業式、宿泊学習、水泳記録会、学習発表会、現地校との交流会、小6修学旅行、マラソン大会、校外学習、社会科見学、餅つき大会、終業式など

3 学期（1～3月）

始業式、校内書き初め、中学部職場体験、卒業生を祝う会、卒業式、修了式・離任式、など
*時数集計上教科カウントのものも含む

3. 現地で行った実践

(1) 現地校との交流

1 小学部修学旅行

小6の修学旅行は、例年2泊3日で実施。

右図のように初日に台湾最南端まで南下し、そこから徐々に北上し台中に戻ってくる。その途中に「地磨兒國小」という原住



民族の多い集落の現地校があり、その小学校との交流が毎年続けられている。この現地校との交流は過去十数年にわたって実施されており、平成 29 年度には「地磨兒國小」の修学旅行で台中日本人学校を訪問するという相互交流も実施できた。

訪問先では、相互の文化を発表し合うことが多く、平成 29 年度の交流では運動会で踊った「ソーラン節」を法被を着ながら披露。現地校からは、原住民族に伝承される歌唱披露や原住民模様の化粧体験など、貴重な時間を共有することができている。

どの交流会もそうだが、初めは言語もうまく通じない上に、双方緊張していることもありなかなか交流がスムーズに進まない。しかし、時間を使って様々な交流をする中で子どもたちは次第に打ち解けあい、最終的には言語が通じない状態でも笑顔で別れの時間を迎えることとなる。



法被を交換しての交流場面



左：原住民の児童 右：日本人学校の児童



運動会で発表したソーラン節を現地校との交流でも披露

2 汝鑾國小 (ずらんりょうこくしょう) ・大雅國中 (だいやこくちゅう) との交流

汝鑾國小も大雅國中も台中日本人学校から距離の近い現地校であり、毎年行っている交流会の一つである。本校と相手校を隔年で会場校として実施しており、同学年同士で交流する。本校開催の場合は「折り紙」「けんだま」「おてだま」などの日本の文化的遊びを教えてあげたりしている。現地校も本校も、子どもは遊びが大好きという点は共通しており、「ドッジボール」「しっぽとり」「けいどろ」など体を動かす遊びも行いながら、交流を深めていく。



なお、前述した通り、本校では中国語を使いこなせる児童生徒が多くいるため、多くの場合、子どもたちが通訳をしたり直接会話したりしている。



3 新民高級中學國中部（現地の私立中学校）短期留学

毎年11月に、中2生徒は1週間、現地の中学校に通い現地の授業を受けている。中国語を話せる子でも緊張する状況の中、ほとんど中国語を話すことのできない生徒にとっては、これまでにない緊張感の中での1週間を過ごすこととなる。例年、参加生徒の多くが不安を口にして短期留学に臨むが、一週間後に戻ってくると一様に「非常に良い体験ができた」「気がついたら友達もできていた」など、充実した感想を述べている。これは、今後、グローバルな世の中で活躍していくであろう生徒たちにとって、日本においては絶対に経験することのできない貴重な体験といえる。

(2) ICT 機器（主に iPad）を使った授業

2016年度に iPad が一学級分導入されたため、その活用法を研究することとなった。同じ台湾にある台北日本人学校ではすでに先行実践されていたため、夏季休業中に職員研修として視察に行ったり、iPad に導入したロイロノートスクールというアプリを開発した社長を講師として招いたり、学校全体として積極的に研修を進めた。また、iPad を使った公開授業も校内で行われ、私も小学部6年生の国語科の授業で公開授業を行った。



この他にも、修学旅行の際には積極的に活用した。前述した「ロイロノートスクール」というアプリを使い、【事前学習】→【当日のバス車内でのプレゼンテーション】→【学習先での写真撮影】→【学習内容のまとめ】を行った。従来の調べ学習と比べ、ロイロノートスクールを使うと調べ学習にかかる時間を大幅に短縮できた。見学先では iPad で写真撮影をしているので、まとめの

作業も非常にスムーズにできた。また、修学旅行当日のバス車内で事前学習の内容をプレゼンテーション



させたことにより、見学先での子どもたちの意欲も強まった。

* 上記実践に関しては、ロイロノートスクール社のホームページに実践記録として掲載されている。

<https://n.loilo.tv/ja/LNScase155>

4. おわりに

日本を外から見ることのできた3年間。それまで意識していなかった、日本の良さと悪さを感じることができた。また同時に、台湾の方々の温かさ、懐の広さも感じることもあった。これらの経験を今後どのような形で還元していくのかが、今後の自分の課題となる。多くの台湾の方々との出会いに感謝の気持ちを込め、本報告を終えたいと思う。

